

玉虫

「玉虫色」という言葉には

いつも空虚さが付きまとう

でも僕の記憶には今でも生々しいものがある

孤独な少年時代の思い出

その中の一枚の画像

青桐広場の向こうに一段下がった畑と

もう一段下の畑との堺に一列に並んだ

トウモロコシ

その中の僕の頭より高く伸びた株の葉に

滲むように輝いたピンク色

吸い寄せられ駆け寄った僕は

あつけに取られて手も震え

胸も高鳴って凝視するのがやっと

やがて躊躇しながらも差しだす指先が

空に揺らいで体が泳ぐ

スローモーシヨンの映像を見るように

空気の甘い振動を伝えて

虹色の生き物は飛び立った

一瞬光景は色彩を失い

カミキリ虫の白黒の斑点と砕けて

少年の夢は消えた

重みのある虚ろさとは

重みのある実態の影なのだ

この瞬間の映像が

未だに僕のアルバムを縁取っている

(2008.10.22)